

ラーフラ（羅喉羅）の命名と釈尊の出家

並川孝儀

1. はじめに

今日我々が知っている釈尊の生涯の内容の殆どは主として初期仏教経典や仏伝などの資料を拠り所として構築されたものである。その中には歴史的に釈尊に源を発する資料もあるであろうが、しかし大半は釈尊滅後の仏教の展開に沿って、その時々々の仏教事情を反映しながら作り上げられてきた資料と考えられる。古いとされる初期仏教経典すらほんの一部を除いて、その殆どは増広発展した後代の解釈に基づく資料であり、仏伝文献にいたっては作者の個人的構想力も相まって創作された一つの作品なのであり、これらから構築された釈尊の生涯に関する事柄に史実を読み取ることは相当困難と言わなければならない。特に、他の一般的な事柄とは異なり、仏教の祖として信仰の対象となった釈尊のその生涯に関連する事柄は、崇拜すべき教祖に相応しい内容に彩られることとなる。それだけに、このような信仰に基づいた解釈が、更に一層我々を史実から遠ざけているのである。文献の成立事情にもまして信仰に基づいた解釈と意図性が、我々に釈尊の実像への道をより一層困難なものとしているようである。

初期仏教経典には、釈尊の生涯を通して描かれた仏伝とは異なり、一生涯を通して記述した資料はなく、殆どが断片的なものである。そのために、この断片的な資料を主として用いて作られた今日の研究書に見られる釈尊の生涯は、あたかもパッチワークの如く、そこには資料の整合性は殆ど見られない。仏伝に従って筋を追い、そして如何に釈尊が偉大であるのかを示すことが主たる目的かのように作られているようにも思える。当然なこととして資料に対する批判的な方法論も一部は見られるが、大半は認められない。そこに確実に見ることができるのは、初期仏教経典や仏伝がそうであったのと同じような釈尊に対する信仰に基づいた解釈であるのか、或いはその追従なのである。

釈尊の実像に迫るためには、先ず或種の装飾を有した資料に対し信仰に基づいた前提によって対応することをなくすことが何よりも必須条件となるのである。その上で、与えられている限られた資料に対して新たな解釈の可能性を模索する必要がある。そこには想像もしないことが待ち受けているかもしれない。しかし、史実の解明に向けてその道を開く努力が今要請されているものと解することは当然のことであろう。

このような釈尊に関する事柄を明らかにしようとする一つのアプローチとして本小論ではラーフラ（羅睺羅）の命名の問題を取り上げ、そこから釈尊の出家の原因を問い直そうとするものである。

2. 釈尊の出家の原因に係わる諸説とその問題点

釈尊の生涯を語る時、出家は世俗を断ち切り悟りを求める人生の分岐点として重要な事柄である。特に、出家の原因に関して知ることは釈尊の精神の変遷を眺める上で、また一人の人間として釈尊をどのように捉えられるかという点でも大切である。しかしながら、これに関する資料は少なく、どれ一つとして確定的な見解を見出すことができないというのが実情である。

出家の原因に関しては、先学によって種々見解が示されている¹⁾が、ここではその中多くの諸説をまとめられた山口益博士等の見解²⁾を用い、それに基づいて出家の原因に関する諸説をまとめて以下に示す。

先ず、出家の原因は内的な動機と外的な条件に区別し考察される。内的な動機とは、端的に言えば釈尊の心中におけるやむにやまれぬ至真なる要求をいうのである。この要求とは、単なる思いつきや名聞・利養のためではなく、「苦からの解脱」のことであり、生・老・死の人生の根本的な苦悩からの解放を意味する。このことは、釈尊の成道が「何故に生・老死の苦があるのか」を次第にその因を内へ内へと追求していき、縁起の理法を体達したことから明らかであり、また創作・脚色されたものであるにしても「四門出遊」の伝説で表そうとしている意味からもその点は証明される。いずれにしても釈尊の出家の内的動機が「苦からの解脱」にあったことに異論はなく、

1) 水野弘元『釈尊の生涯』（春秋社）pp. 41-45、中村元『ゴータマ・ブッダ—釈尊の生涯—』中村元選集第11巻（春秋社）pp. 77-89、同『ゴータマ・ブッダ』（決定版）pp. 183-204、修山脩一「釈尊出家の動機について—輪廻転生の問題—」『佐賀龍谷学会紀要』第九・十合巻号 pp. 1-13、武内義範「佛陀の出道」『哲学季刊』第4号 pp. 96-124など。

2) 山口益・横超慧日・安藤俊雄・舟橋一哉『仏教学序説』（平楽寺書店）pp. 41-49

これが出家の目的とあってよい、とされる。

この内的な動機に対して外的な条件は、個人的な理由として四説を、そして社会的・時代的事情によるものとして六説が挙げられる。

個人的な理由の四説とは、

- (1) 生まれて間もなく生母マーヤー夫人が亡くなったこと、
- (2) 生まれつき瞑想的な気質をもっていたこと、
- (3) 宮殿における裕福な生活に嫌悪を感じていたということ、
- (4) 一子ラーフラの出生が、二つの意味において出家を促したということ。即ち、当時インドでは家系の断絶が宗教的罪悪と見られていたためにラーフラの出生によってそれから回避できたこと、出家するなら子供への愛着が深まらない間にしようとの決心から、という二つの意味で出家を促したということ、

そして社会的・時代的事情による六説とは、

- (1) 当時の釈迦族の国が政治的情勢において劣勢にあったので、将来への希望がもてなかったということ、
- (2) 道を求める者が出家することは、当時のインドの一般的な風潮であり、釈尊もそれに従ったということ、
- (3) 不平等な社会的階級の不合理を解決しようとしたこと、
- (4) 当時のバラモン教が因習に墮し、人々の精神的支柱となっていなかったということ、
- (5) 当時の厭世観に影響を受けたということ、
- (6) 政治的・社会的な闘争の醜悪を見て、その不合理を解決しようとしたこと、

である。

出家の原因と考えられる見解は上記の諸説の中に殆どが含まれている、と言ってよいであろう。これらの諸説の中でも、特に内的な動機とされている「苦からの解脱」と外的な条件の一つであるラーフラの出生が出家の原因に係わるものとして取り上げられるのが一般的であろう。前者では、その題材として「四門出遊」伝説が、そして後者では出家の決意を鈍らせるとの理由で「障碍 (rāhula) が生じた、束縛が生じた」という言葉を発し、その言葉を聞いた父王のシッド・ダナ王（浄飯王）がその語に因んでラーフラと命名して、この出生を契機に出家をしたという伝説が採用される。

さて、これら諸説の中でも内的な動機となる見解は、人間の根本的問題を宗教的に解決しようとの決意を示したものであり、それは偉大な宗教者に相応しく、至極当然のように思える。しかし、よく考えるとその見解には問題がある。釈尊は縁起の法を

静観することによって成道したといわれ、諸行無常、諸法無我の世界観を体得し、苦の原因とそれからの解放の道を明らかにされたが、このことはあくまでも釈尊が修行の後に得られた宗教的境地である。だから、このような修行の後に得られた内容が出家の原因を考察する際に用いられるのは不適當と言わねばならない。「四門出遊」伝説にしてもこのような後の境地を反映して創作・脚色されたものと解せるもので、原因の資料として使用するの論理的ではない。この手法は偉人一般に使用される常套手段の典型と言えよう。ただ、動機があったからこそそれを解決しようとして修行し、その結果そこに解決の方法を見出したのであるから、精神の連続性から考えても「苦からの解脱」を動機とすることに不思議はない。しなしながら、この苦がいわれているような生・老・死のみであったかどうかは疑問が残る。この生・老・死が苦というのは、当時のインドにおける一般的な人生観であって、決して釈尊一人だけのものではないのである。「苦からの解脱」という要求は当時のインドで道を究めようとする者が共通して求めるところであり、この理由だけをもって釈尊の出家の原因と考えることは、それ自体不合理とは言えないが、しかし当時釈尊がおかれていた状況を考えるならば、これだけで出家の真実の原因を究明したことにはならないであろう。また、「善を求めて (kimkusalagavesi)」³⁾出家したという倫理的な理由もこれと同じである。仏伝などにおいては他の宗教と比較して釈尊の優越性と固有性を常に表明する姿勢が底辺に流れていることを考慮に入れるならば、このような一般的な理由だけで出家の原因を説明することには納得がいかない。そこには釈尊の現実的・個別的・直接的内容を有する動機がなければならないであろうし、決意に到るもっと深刻な事情が背景にあったと考えなければならないであろう。この深刻な事情がたとえ宗教的な意味をもったものであるにしても、そのことを知るには結局成道によって得られた宗教的境地からの推測によらねばならず、他にその真実の理由を知る客観的な手立てはない。いずれにしても、このような手法で信仰の対象として仏教の祖に相応しい理由付けを行うことは容易なことではあるが、しかし学問の方法として考えるならばそれは回避しなければならない姿勢である。

一方、ラーフラの出生に関して言えば、日が経つにつれて子に対する愛着が強くなることは常であり、それを恐れて出家の時期を早めたり、出家を促す契機にはなったであろうが、これが出家の直接の原因とは考えられない。いずれにしても、このような出生を伝える資料は出家の原因を考察するのに用いるものではないであろう。

3) *Dīgha-Nikāya* (PTS 版), vol. II p. 151 l. 26 (kimkusalānuesī), *Majjhima-Nikāya* (PTS版), vol. I p. 165 l. 15, p. 166 l. 35など。

それでは、これより釈尊に出家を決意せしめた深刻な事情とは何であったのか、個別的な事情があるとするならばそれは何であったのか、を究明するに当たり、ラーフラの命名に視点をおいてその命名の意味を読み取り、そこから釈尊の出家の原因について考えてみることにする。

3. ラーフラ (Rāhula) の出生

ここでは、ラーフラの出生に係わる資料を眺め、彼が何時出生したと伝えられているのか、その時期を基準にまとめることにする。

ラーフラの出生の時期は諸伝承を眺めてみると、釈尊の出家以前と出家以後とに大別できる。そこで、先ず最初に釈尊の出家以前に出生したと伝える資料であるパーリ伝承の *Jātakatṭhakathā* の *Nidānakathā*⁴⁾ を見る。そこには、釈尊は出家をするその夜に御者のチャンナを送り出し、息子を一目見ようと思って寝室を覗くが、母親に抱かれて寝ている息子を見て、息子を抱いてみたいと思っても抱けば王妃が目を覚まし、私の出家の邪魔になるであろうと考え、その場を去った、と記述されており、それに続いて、

「ところで、ジャータカ註釈⁵⁾には、『その時はラーフラ王子が生まれて七日であった (*tadā satt-āhajāto Rāhulakumāro hoti*)』と述べられているが、このことは他の註釈書には記述されていない。故にここだけであると理解されるべきである。」

と説明が補足されている。この資料を見る限り特定ではあるが、或る註釈書は釈尊の出家の時期をラーフラの誕生後七日と明示していることが判る。

更に、*Dhammapadattṭhakathā*⁶⁾ でも四門出遊の伝説に基づいて老・病・死の苦から出離すべきであると、心に出家を願っている釈尊に一子ラーフラの誕生が知らされる、との記述が見られる。この伝承も具体的な時期は明記されていないが、釈尊の出家以前にラーフラが出生したと伝える⁷⁾。

4) *Jātaka* (PTS 版) vol. 1 p. 62 ll. 12-21

5) これは現行の『ジャータカ注解』以前のシンハラ語で書かれた古い『注解』に含まれる「ニダーナカター」を指し、現在は伝わっていない、とされる。藤田宏達『ジャータカ全集1』(春秋社) p. 403訳註 (112) を参照。

6) *Dhammapadattṭhakathā* (PTS 版) vol. 1 p. 84 l. 17-p. 85 l. 9

7) 他に *Buddhacarita* (『佛所行讚』) の記述も出家前と見做せるが、時期は限定できない。E. H. Johnston “*Aśvaghōṣa’s BUDDHACARITA or Acts of the Buddha*” (*Motilal Banarsidass*) p. 18, 『佛所行讚』大正蔵4巻 p. 5・a, 原実訳『ブッダ・チャリタ』(中央公論社『大乘仏』

この上記の伝承に対して、出家後に出生した資料としては『根本説一切有部毘奈耶破僧事』などが挙げられる。先ず『破僧事』⁸⁾の記述の大筋を示すと、

「釈尊が出家する時にヤシヨードラーは妊娠したが、釈尊が六年間苦行を行っている間ヤシヨードラーも王宮において苦行し、そのために胎児の成長も止まっているようであった。しかし、釈尊が苦行を断念し体調を整えるのと同じ時期にヤシヨードラーのお腹も大きくなってきた。そして、暫くして一子ラーフラが生まれた。これを知った釈迦族の人々は「この子は釈尊の子ではない」とヤシヨードラーを非難した。これを聞いた彼女は嘆き悲しみ、ラーフラを石の上に置き、それを池に投げ入れ、「もしこの子が釈尊の実子でないならばこの石は沈むであろうし、もし実子なら浮かぶであろう」と言った。その石は沈まず、人々はそれを見て大変不思議であると驚いた。また、ヤシヨードラーは釈尊が成道後六年して戻ってくる時にラーフラが実子であることを示そうと考える。そしてカピラ城に戻った時、彼女は術法を使う外道の女から薬丸を手に入れ、それをラーフラに握らせ、この薬を父に与えよ、と言った。釈尊は一切智を具足しているので、彼女がラーフラを生んで世間から誹謗されているのを知って、この誹謗を除いてやろう、と念じられるであろう。そこで、釈尊は五百の仏に化けてみるが、ラーフラは間違わずにその薬を釈尊のもとに赴き渡す。浄飯王や釈迦族の人々はこの不思議な出来事に驚き、敬重し、ヤシヨードラーはこれによって受けた誹謗や悪名もなくなり歓喜した。」

という伝承が記述されている。『破僧事』には他の箇所⁹⁾でもラーフラの出生に関する記述が見られるが、そこではこの前半と同様の伝承が伝えられるのみである。内容もほぼ同じであるが、出生は釈尊の成道の時と明示され、また実子でないと誹謗したのは浄飯王となっており、疑いが晴れてから浄飯王はラーフラを深い愛情をもって育てた、という点などが異なる。『衆許摩訶帝経』¹⁰⁾に見られるラーフラの出生の伝承もこれにほぼ同じものである。

他の伝承としては『雜寶藏経』中¹¹⁾に見られる。そこには、次のような話が述べられている。

〔典第13巻〕 p. 46, 梶山雄一・小林信彦・立川武蔵・御牧克己訳『ブッダ・チャリタ』(講談社『原始仏典十』) p. 23を参照。

8) 大正蔵24巻 p. 158・c-p. 159・b

9) 大正蔵24巻 p. 124・b-c

10) 大正蔵3巻 p. 950・c-p. 951・a

11) 大正蔵4巻 p. 496・b-p. 497・b

「釈尊が出家する夜にラーフラが夫人の胎に入り、その後六年間の苦行を経て成道した夜にラーフラが生まれた。それを知った女官達は大いに憂い悩み、ヤシヨードラーは何と軽率な行為をしたのか、恥ずべき行いである、出家後六年も経って子を生むとは一体誰の子なのか、我らの種族を辱めるものだ、と言って叱った。その時、大地が震動したので、浄飯王は何か不吉なことが起こったのではないかと思い、息子が死んだのではないか、そうなら我が種族は代々の王が相続して今日に到ったのに死んでしまったらそれも断絶してしまわないか、と嘆き悲しんだ。その時、宮中で更なる嘆きの声を聞いて王は、本当に息子が死んだのか、と尋ねると、そうではなく今ヤシヨードラーが子を生んだのでそれで嘆いているのです、と答えた。これを聞いて王は、何と恐ろしいことだ、我が息子が出家して六年が経つのに今どうして子が生まれるのか、と益々憂悩して大声をあげて泣き悲しんだ。そして、ヤシヨードラーはその真偽のほどを尋ねられ、彼女は正直に、シッダルタという釈迦族の出家者との間にできた子であります、と言ったが、王はこれを正直に話していないものとして怒る。そこで、どのように殺して処罰すべきか、と家臣達に相談した結果、火の燃える穴に投げ入れて母子とも焼き尽くすことが最も適当である、と決める。準備が整ったその場で、何の救いの手もなくヤシヨードラーは、罪がないのにどうしてこのような罰を受けなければならないのか、と子を抱きながら長嘆する。その時、彼女は釈尊に向かって、どうぞ罪のない我ら母子を救って下さい、と念じながら合掌して火に向かう。そこで、この子は決して他の男との子ではなく、六年もの間私の胎に止まっていたのです、このことが嘘でないならばこの火は消滅するでしょう、と言って彼女がこの火中に入ると、この火の穴はたちまち池に変じ、母子はその蓮の上にあった。これを見ていた釈迦族の人々はヤシヨードラーの言葉は真実であり、何の罪もないことを知った。その後、人々の母子への疑いも晴れ、そして浄飯王のラーフラへの愛情も一層深まった。」

という伝承が記されている。この『雜寶藏經』の伝承は、ラーフラが釈尊の実子ではないという点に力点が置かれ、それに関する記述が極めて詳細であるところが顕著であり、そしてラーフラが釈尊の実子かどうかの真偽のほどを証明する火の穴の話も他には見られない内容である。

以上から、ラーフラの出生時期に関してほぼ二説、即ち釈尊の出家前の説と成道時の説が存在することが判明した¹²⁾。前者は南方伝承に、後者は北方伝承に偏っているようであるが、この点については簡単に判断することはできないであろう。『根本説

一切有部毘奈耶破僧事』や『雜寶藏經』などの伝承では、出生の時期に基づいてラーフラが釈尊の実子か否かという点を詳細に記述していることは興味深い。そのいずれもが出家後六年の成道時の出生を問題にして、実子か否かの疑いに対しヤンショダラーが各々の方法を用い実子であることを証明し、それによって認知される、といった形式をとる。この伝承で最も注意しなければならない点は、結果的に釈尊の実子として認知されるものの、このように実子でないというような疑惑が取り上げられるという極めて微妙にして重要な内容が主題となり、問題視されたことにある。仏教の祖とその子という言わば聖域だけにその内容には大変驚かされる。何故、このような内容が記述され、伝承されたのか¹³⁾、そこには様々な問題が孕んでいることが想像できる。出家後六年してからの出生は、伝承においては実子と認める形で締めくくられているが、常識的には実子でない¹⁴⁾と断定しうる可能性を有する重大な問題でもある。この点に留意しながらラーフラの出生と釈尊の出家の原因について考察しなければならない。

4. ラーフラという名の意味

その解決への糸口としてラーフラの命名の意義を考察するが、それに先立ち「ラーフラ」の意味についてこれより眺める。

ラーフラは羅睺羅、羅怙羅、羅云、障月などと漢訳されるが、彼は釈尊の実子といわれ、後に出家して学習を好む者の中で第一である密行第一といわれ、十大弟子の一人として有名である。

前項で見たようにラーフラの出生に関する伝承に相違があったが、それと同様に命名に関する異説が見られる。大別すると、それは二説である。

最も一般的な解釈は、パーリ伝承の *Jātakaṭṭhakathā* の *Nidānakathā* に見られる記述¹⁴⁾に基づくものである。その場面を示すと以下の如くである。

- 12) 尚、大衆部系の説出世部所伝の *Mahāvastu* には、ラーフラが兜率天より母の胎内に入ったその夜に、そのことを知った釈尊（菩薩）は出家した (*agārād anagāriyam abhiṇṣkrāmati*)、とされ、更に六年間母の胎内にいたと記述されていることから、ラーフラは釈尊の成道時に出生したと考えられる。É. Senart, "Le Mahāvastu" (*Meicho Fukyūkai*) vol. II p. 159 l. 3-p. 162 l. 4, vol. III p. 172 ll. 5-7, これに関して平岡聡氏より助言を頂いたことに感謝したい。
- 13) 後代の伝承において、釈尊が成道を得て遊行していた時にデーヴァダッタ（提婆達多）は釈尊の妃であるヤンショダラー（耶輸達羅）を誘惑したが、拒否された、という記述に代表されるデーヴァダッタとヤンショダラーの関係を示す話と、ここでいうヤンショダラーのラーフラ出生の一連の話とが、伝承上関係があるとも考えられる。『根本説一切有部毘奈耶破僧事』大正蔵24巻 p. 149・b-p. 150・a
- 14) *Jātaka* (PTS 版) vol. 1 p. 60 ll. 20-25

「その時、『ラーフラの母が男の子をお生みになりました』ということを知り、スッドーナ大王は『息子（菩薩）に我が喜びを伝えよ』と言って使いを遣った。菩薩はそのことを聞いて『障碍（ラーフラ）が生じた、束縛が生じた (rāhulo jāto, bandhanam jātan)』と言った。王は『我が息子は何と言ったのか』と尋ね、その言葉を聞くと『これより後、我が孫はラーフラ王子という名にしよう (ito paṭṭhāya me nattu Rāhulakumāro yeva nāmaṃ hotu)』と言った。」

この記述を見ると、子が生まれた際に何らかの理由で、「障碍（ラーフラ）が生じた、束縛が生じた」と言葉を発したのを聞いた父王のスッドーナ王（浄飯王）がその障碍（ラーフラ）という語に因んでラーフラと命名した、と伝えている。この伝承が今日では一般的で、釈尊はこの時既に出家を望んでいたことから子の誕生はその妨げとなるという理由から障碍が生じた、束縛が生じた、と言ったのであるとの解釈が施されている。

次に、ラーフラという語の他の解釈について論じてみよう。ラーフラの原語は Rāhula であるが、これは Rāhu-la と分解でき、その意味は「ラーフを得たもの、ラーフを取ったもの、ラーフが与えられたもの」となる。このラーフは悪魔の一種であるが、それが何であるのか、その詳細は後述するとして、Rāhu-la の語義について更に述べると、上述の「障碍（ラーフラ）が生じた、束縛が生じた」の前半部分は、後代のパーリ文献に従えば「ラーフの捕縛ができた」と理解するか、或いは「ラーフ [のようなもの] ができた」とのどちらかに解すべきである、と指摘されている¹⁵⁾。この語義解釈から判断すれば、釈尊が語ったとされる「障碍（ラーフラ）が生じた」というラーフラとは、「障碍」や「邪魔者」という意味に解するのではなく、あくまで「ラーフ [という悪魔] の捕縛ができた」、「ラーフ [のような悪魔] ができた」或いは「[悪魔である] ラーフ性を有する者ができた」と理解されることになる。そうであるならば、結果的に釈尊がこの時既に出家を望んでいたので子の誕生はその妨げ

15) 片山一良「la の意味—羅睺羅を中心に—」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』9号 pp. (21) - (24)。ここでは、Rāhu-la の語義を Saddanīti, Moggallānavyākaraṇa, Mahāpadānasuttatīka, Abhidhānappadīpikāṭīka などの文献に基づいて詳細に論じられている。この説に対して中村元博士は「ラーフは古代インドの神話では、悪鬼の名で、この悪鬼が太陽を呑みこむと日食がおこり、月を呑みこむと月食がおこると考えられていた。後代の仏教徒は、子がシッダッタ太子の束縛となるという点で、ラーフラという名が悪鬼を連想させて、こういう通俗語源解釈を行なったのである。」という見解を示されている。このような語義解釈は後代の通俗的なものであって、ラーフラの命名の真実を示すものとはならないと、この解釈をあまり重要だとは考えられていないようである。しかし、そこにはただ後代の仏教徒にラーフという悪魔を連想させた、という説明だけで、他に何の論証も示されておらず、その見解に至られた理由は判りかねる。中村元 op. cit. (決定版) p. 177

となったという理由から「障碍」や「邪魔者」と解釈する立場は成立しなくなる。

いずれにしても、この問題の理解はラーフという悪魔が一体如何なる意味を有するものであるのか、という点に譲らなければならない。

5. 悪魔ラーフ (Rāhu)

それでは、このラーフという悪魔がどのようなものであるのか、その用例を眺める。まず、古代インドのサンスクリット大叙事詩であるマハーバーラタ (Mahābhārata) 中にラーフの伝説が見られる¹⁶⁾が、それは特に「乳海攪拌」の物語として有名である。ここで、その話の概略を以下に記す。

「神々はアスラ (阿修羅) と共に大海を攪拌すれば甘露が得られよう、と考えて、マンダラ山を攪拌棒として用い、亀王を軸として、そして龍王がそれに巻き付き、神々とアスラが両端を持ってぐるぐると回し大海を攪拌した。かき混ぜている間に樹液や薬草が海水と混じり合い、大海の水は甘露にも似た乳液となり、それを飲んだ神々は不死の身となった。しかし、甘露そのものは現れなかったので、ヴィシュヌ神とブラフマーの助けで神々は再び乳状の大海を攪拌した。すると、その中から吉祥天女や酒の女神、月、白馬、そしてついに甘露の入った壺を持ったダンヴァンタリ神が姿を現した。この様子を見ていた悪魔達は甘露を横取りしようとしたので、ヴィシュヌ神は美女に姿を変え、彼らから甘露を奪い戻した。それを知った悪魔達は神々を襲ったが、その間に神々は甘露を飲み始めた。その時、ラーフという悪魔が神に変装して甘露を飲もうとしてその甘露が喉に達したその瞬間、太陽と月がそれを見つけヴィシュヌ神に告げた。それを聞いたヴィシュヌ神はラーフの首を円盤で切り落とした。頭は胴体から離れ地上に音を立てて崩れ落ちた。このことがあって以来、頭だけのラーフは太陽と月を恨み、その結果ラーフが太陽と月を呑み込む毎に日食と月食が起きるのである。この後も、神々と悪魔達の戦いが続いたが、ヴィシュヌ神等の働きで、神々が勝ち、悪魔達は空や海に逃げ去り、姿を消してしまった。」

16) V. S. Sukthankar, "MAHĀBHĀRATA" vol. 1 1.15-1.17 (pp. 119-128), 辻直四郎編『印度』(南方民俗誌叢書5) pp. 352-354, 上村勝彦『インド神話』(東京書籍) pp. 62-64, 英訳からの和訳としては山際素男編訳『マハーバーラタ』第一巻 (三一書房) pp. 43-46などがあり、それらを参照。尚、日食、月食と悪魔ラーフに言及した他の文献に、六世紀中葉の学者ヴァラーハミヒラの『プリハット・サンヒター』がある。上村勝彦・宮元啓一編『インドの夢・インドの愛』(春秋社) pp. 358-362 (矢野道雄分担部分)

この物語は、ラーフという悪魔が太陽神と月神に対して恨みを持ち、その復讐のためにそれらを呑み込むことから日食と月食が起こる、と伝えている。即ち、このラーフという悪魔は太陽神と月神の敵として存在するものと位置付けられていることが判る。

次に、仏教經典においてはラーフがどのように説かれているのかを眺めてみたい。先ず、初期經典の *Samyutta-Nikāya* の第二章 *Devaputta-samyutta* 第九経、第十経の *Candima* と *Suriyo* に見られる。ここで、*Candima*¹⁷⁾ を例にとり、その内容を示すと以下の如くである。

「その時、神の子である月〔の神〕がアスラの王ラーフに (*Rāhunā asurindena*) 捕らえられていた。そこで神の子である月〔の神〕が世尊を思い出して、その時に次の詩をうたった。

『勇者ブッダよ、あなたに帰依いたします。あなたはあらゆる点で解脱されています。私は障碍に身を委ねております。〔どうぞ〕この私の拠り所となつて下さい』

そこで、世尊は神の子である月〔の神〕に関して、アスラの王ラーフに次の詩をうたい語りかけた。

『如来であり、尊敬されるに相応しい〔この私〕に、月〔の神〕は帰依した。ラーフよ、月を解き放つてやれ。ブッダたちは世の人々を慈しむものなのです。』

そこで、アスラの王ラーフは神の子である月〔の神〕を解き放ち、急いでアスラの王ヴェーバチッティのところに行った。近づいて、髪の毛も逆立つくらい恐れおのきながら一方の端に立った。一方の端に立ったアスラの王ラーフにアスラの王ヴェーバチッティは次の詩をうたい語りかけた。

『ラーフよ、おまえはどうしてそんなに急いで月を解き放つたのか。恐れおのきながらやって来て、どうして恐ろしそうに立っているのか。』

〔それに答えて、ラーフは次の詩をうたった。〕

『もし月〔の神〕を解き放たなければ、私の頭は七つに裂けてしまうでしょう。〔そして〕生きたとしても決して安樂は得られないでしょう。私はブッダに詩で語りかけられた (*abhigīto*) のですから。』

と。』

17) *Samyutta-Nikāya* (PTS 版) vol. 1 p. 50, 『雑阿含経』大正蔵 2 卷 p. 155・a-b, 尚、『大智度論』にもこの経と同じ伝承が見られる。大正蔵 25 卷 p. 135・b

この Candima の中の「神の子である月〔の神〕」を「神の子である太陽〔の神〕」と置き換えたのが、第十経 Suriyo の内容¹⁸⁾であり、両経はほぼ同一の経と言える。この経の主旨はブッダの力の偉大さをうたったところにあるが、ラーフについて言えば月の神（太陽の神）を捕らえるといった具合に、ラーフは月と太陽の敵として描かれている。

また、Gandhārajātaka (406) の中にもラーフが登場する¹⁹⁾が、そこでは次のように表現されている。

「ガンダーラ王とヴィデーハ王が王位を捨てて出家し共に生活を始めるが、或る満月の夜に二人は真理 (dhamma) について語り合っていた時、天空に輝いている月をラーフが覆った。そこで、ヴィデーハはどうして月は輝かなくなったのか、と尋ねると、ガンダーラは「ラーフというものは月にとって一つの煩惱であり、輝かさないのである。私もラーフに攻撃された月 (candamaṇḍala) を見て『この清らかな月は、外からやって来た煩惱によって輝かなくなった。この王位は私にとって煩惱である。ラーフが月を輝かさなくするように、この〔王位〕が〔私を〕輝かさなくしてしまわない間に、私は出家しよう。』」と、直ちにラーフに攻撃された月を縁として、大王の位を捨てて、出家したのです。」

ここには、王が王位を煩惱だと考え、その王位を捨てて出家したその理由の例示として、ラーフを月の煩惱と譬えて、それ故に月が輝かなくなった、と説明されている。ここでも、ラーフは月を攻撃するもの、清らかな月の輝きをなくすものとして描かれている。

その他、ラーフに関係する用例としては Rāhumukha を挙げることができよう。その一つは「あたかもラーフの口から解き放たれた月のように (cando yathā Rāhumukhā pamutto)」²⁰⁾という用例であり、他は「ラーフの口〔の刑〕も苦しみである (Rāhumukham pi dukkham)」²¹⁾の用例がある。前者は上記の例と同じ用法であり、後者は悪魔ラーフの恐ろしさを具体的に応用した一つの例である。

漢訳文献の中、『大毘婆沙論』にもラーフ（邏呼）の用例²²⁾が見られる。そこでは、

18) 同 vol. 1 p. 51, 『雑阿含経』にこの対応経典はない。

19) Jātaka (PTS 版) vol. 3 p. 364 l. 9-p. 365 l. 27

20) Jātaka (PTS 版) vol. 1 p. 183 l. 25

21) Milindapañho (PTS 版) p. 197 l. 7, この刑は口を鉄針で開き、その中に油を注いで火を点ずる方法で行うものである。和訳には中村元・早島鏡正訳『ミリンダ王の問い2』（東洋文庫15, 平凡社）p. 196があり、それを参照。

22) 大正蔵27巻 p. 141・a, 尚、南方伝承の Cullavagga の七百韃度の記述中にも、太陽と月を覆うもの (candimasuriyānam upakkilesā) に四種、即ち雲 (abbham) と霧 (mahikā) と煙

太陽と月を遮るものとして五種挙げの中に説かれる。その五種は、雲、煙、塵、霧、そして曷邏呼阿素洛の手である。この曷邏呼阿素洛の手に関しては、アスラ（阿素洛）が天と戦っていた時、天が太陽と月に力を得て常に勝利したのに腹を立て、これを破ろうとして様々に智術を尽くすが、破れず、ついに手でこれを妨げた、という説明がなされている。この分類は別として、悪魔ラーフは太陽と月を遮るアスラとされている²³⁾。

以上、ラーフの用例を眺めてきたが、『マハーバーラタ』や『プリハット・サンヒター』などの文献ではラーフは太陽と月を呑み込む悪魔として描かれているのに対して、仏教文献では主に月を呑み込む悪魔として説かれている。太陽を遮る悪魔としてはパーリ文献のみに残る Samyutta-Nikāya の例の他、ごく一部にだけしか見出せない。このことが、ラーフラ命名に係わってその意味を限定しようとした仏教の展開における意図性と何らかに関連付けられるかどうかは判断しかねるが、仏教文献に太陽を食べるラーフの表現が極めて少ないことには留意しなければならないであろう。

さて、第4項でラーフラの命名の理由に関して述べたが、ここで再び悪魔ラーフに因んでラーフラが命名されたと伝える資料を眺める。

先ず、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』には、ラーフラの誕生と時を同じくして生まれたアーナンダと比較し、人々が歓喜したことからアーナンダと命名されたとするのに対して、ラーフラに関しては

「羅怛羅_レ月、因_レ此應_三以為名_二羅怛羅_一」²⁴⁾

と、悪魔羅怛（ラーフ）が月を遮ることに因んで羅怛羅（ラーフラ）と命名した、と伝える。これと同様の記述は『衆許摩訶帝経』²⁵⁾にも見られる。

他方、Buddhacarita の第2章第46偈²⁶⁾には

「顔がラーフの敵である月 (Rāhusapatnavaktro) と見まちがうラーフラという名の息子が生まれた。」

とある。ここでは上の伝承と少し異なり、悪魔ラーフそれ自体に因んで名付けられた

塵 (dhūmarajo) とアスラの王ラーフ (Rāhu asurindo) があるとする。『大毘婆沙論』とは五種と四種の分類に相違はあるものの内容は同一である。Vinaya Piṭaka (PTS 版) vol. II p. 295 ll. 21-30

23) 漢訳文献では他に『正法念処経』の畜生品において説かれる。そこでも、羅睺阿修羅王はその手をもって日月などを覆う、と記述されるものの日食の起こる理由は触れられず、月食のみが説かれる。大正蔵17巻 p. 107・a-108・a

24) 大正蔵24巻 p. 124・c、同様の記述は同24巻 p. 158・c にある。

25) 大正蔵3巻 p. 950・c

26) Buddhacarita, op. cit. p. 18 l. 2. 漢訳『佛所行讚』にはこのような表現は見られない。原実訳『ブッダ・チャリタ』p. 46、梶山・小林・立川・御牧訳『ブッダ・チャリタ』p. 23

のではなく、ラーフの敵である月と見まちがう者として命名した、と伝える。しかし、ラーフラの命名に悪魔ラーフが関連している点では共通している。

このように見てくると、上述したラーフラの名の意味は、語義解釈にあったのと同様に悪魔ラーフに関連したものと理解しなければならないことが判明する。北伝文献を中心に描かれた資料から見ても、ラーフラの命名は悪魔ラーフに因んでなされたものと判断してよいであろう。

以上の資料からラーフラの意味を考察する時、パーリ文献に見るように「障碍(ラーフラ)が生じた、束縛が生じた、」と言葉を聞いた父王のスッドーダナ王(浄飯王)が障碍(ラーフラ)に因んでラーフラと命名したとする伝承はラーフラを「障碍」と解釈するものであるが、語義や命名の必然性の面から考えても十分に説得力をもたない。それに対して北伝の諸文献に伝えられる「日食と月食のラーフという悪魔性を有した者」との理解は、語義や命名に関する具体的な話においても整合性があり、これをラーフラの命名の意味と解釈するのが最も妥当であろう²⁷⁾。

6. ラーフラ命名とその意味

子供の命名に際して悪魔性を有した者という意味の名を付けること自体常識の域を越えたものである。況んや、ラーフラのように釈尊の子として、即ち王族の後継者としてその誕生においてこのような命名は極めて不可思議と言わざるを得ない。何故このような名を付ける必要があったのであろうか。そして、この悪魔がラーフという日食と月食の悪魔であることそれ自体が一体どのような意味を持つのか、その悪魔でなければならない必然性があったのか、などについて考察しなければならない。

この異常ともいえる命名と、ラーフという悪魔の必然性の是非を考える時、釈尊の家系について触れる必要があろう。そこで、以下それに関係する資料を眺めてみる。

先ず、Suttanipāta 423偈²⁸⁾に

「先祖は太陽神(ādiccā nāma gottena)といい、氏族名は釈迦と申します。王よ、私はそのような家系〔の生まれ〕で、出家いたしました。〔世の中の〕もろ

27) パーリ伝承がラーフの意味を太陽と月を呑み込む悪魔とするのに対して、北方伝承は月を呑む悪魔に偏重して記述しているが、この伝承の在り方はパーリ伝承でラーフラの意味を単に障碍としてその内容を特定していないのに対して、北方伝承ではその意味を明確に悪魔ラーフと記述している伝承と何らかに関連付ける必要があろうか。両伝承共にラーフが太陽を呑み込む悪魔であり、そしてそれがラーフラの命名の理由であると記述していない。この点において両者の伝承に意図性があるのではないかと、読み込むことは行き過ぎであらうか。

28) (PTS 版) p. 74 ll. 1-3

もろの欲望を求めることなく。」

ここでは、釈尊が太陽神の末裔であり、その家系の一人と表現されている。このことは、初期經典において「ādiccabandhu（太陽神の末裔）」が釈尊の固有の呼称として使用されていた事実²⁹⁾からも知ることができる。

また、この Suttanipāta と同様の内容を示すものが他の文献においても見られる。Buddhacarita の第一章第一偈は釈尊の父浄飯王をうたった詩であるが、そこにも興味深い内容が知れる。その部分はサンスクリットが残されていないので、チベット訳³⁰⁾と漢訳³¹⁾を示すと以下の如くである。

「イクシュヴァークと力が等しく、イクシュヴァークの末裔であり、無敵のジャーキャ族において行いの清らかな〔そして〕すばらしい月の如くに好まれた浄飯という名をもつ王が現れた。」

「甘蔗之苗裔 釈迦無勝王 浄財徳純備 故名曰浄飯-」

ここで、浄飯王がイクシュヴァークの末裔と記述されているので、当然のこと釈尊も、そしてラーフラもイクシュヴァークの末裔となる。ところで、このイクシュヴァークとは古代インドにおいて太陽神スールヤを祖とする日種族の王統を開いたものとされる。この資料は Suttanipāta と同じく、釈尊が太陽神を先祖としていることを示している。即ち、釈尊の一族は太陽神を先祖とする家系なのである³²⁾。

さて、上記の資料を眺めた時、ラーフラの命名が一体如何なる意味をもつことになるのであろうか。ラーフラが「日食と月食のラーフという悪魔性を有した者」という語義をもち、太陽と月を呑み込む悪魔であることを考える時、ラーフラという命名が極めて重大な、そして深刻な状況の中でなされたことを示唆してくれる。即ち、ラーフラという名は釈迦族の先祖である太陽神を呑み込む悪魔であり、釈迦族の家系を断ち切る悪魔性を有した者ということになる。ラーフラの出生にこの名が付けられたこと³³⁾は、この出生自体に釈迦族の家系を断ち切るほどの、或いは汚すという常識では

29) 拙稿「原始仏教におけるブッダと仏弟子—両者に関する表現の異同と呼称より見て—」『前田恵学博士頌寿記念・佛教文化学論集』pp. 296 (485) -297 (484)。因みにゴータマ・ブッダ固有の呼称として、他に Sugata, Cakkhumant, Lokanātha などが挙げられる。

30) 北京版 (TTP.) vol. 129, 123-1-1~123-1-3

bu ram shing par mthu mnyam bu ram shing pa'i rgyud //

thub dka' shā kya rnam la spyod pa rnam dag pa //

'phrog byed zla ba lta bur skye dgu rnam la sdug //

rgyal po zas gtsang zhes bya'i ming can byung bar gyur //

原実訳『ブッダ・チャリタ』p. 7, 梶山・小林・立川・御牧訳『ブッダ・チャリタ』p. 3

31) 『佛所行讚』大正蔵4巻 p. 1・a

32) ゴータマの家系に関する諸問題については、中村元 op. cit. (決定版) pp. 52-62に詳述されている。

到底考えられない事情が背景にあったと見做すべきであろう。当時のインドでは家系の断絶は宗教的罪惡とすら見られていたことを考えれば、尚更のことクシャトリアの階層である釈迦一族においてラーフラという命名は、先祖の否定や家系の滅亡・断絶などを意味することになる。

ところで、ラーフラの出生の時期に二種の伝承があったことは既に述べたが、釈尊が成道された時の出生説とは違い、ラーフラの出生が釈尊の出家前の説の場合、この命名は釈尊の出家と関連したものであるという意義を有することになる。即ち、この立場はラーフラの命名に纏わる事情が釈尊の出家を促したのではないかという解釈を生む。この命名に纏わる事情とは何であるのかと言えば、それはラーフラという名のもつ意味が教示してくれよう。先祖の否定や家系の滅亡・断絶を意味するような命名が具体的に何を意味するのかは、想像する以外に方法はないが、少なくとも瞑想的気質や苦からの解脱といった宗教的理由だけではないことは確かであろう。ここで、この命名の背後にある真意が何であったのかを探る一つの手掛かりを与えてくれるのが釈尊の成道時におけるラーフラ出生説での物語である。それは既述したように、ラーフラが釈尊の実子であることへの疑惑という驚くべき伝承の存在である。ヤショーダラーの釈明によって疑惑が晴れたと結ばれているものの、そこには実子ではないとの疑惑の伝承が間違いなく存在していたことだけは事実である³⁴⁾。成道が出家後六年であると考えらるなら、常識的にラーフラは釈尊の実子であると理解することのほうが問題である。この成道時のラーフラ出生説が実子の疑惑を伝えることを勘案する時、もう一つの伝承である出家前のラーフラ出生説の背後にある深刻な事情もこれと同質の問題として理解できるのかもしれない。いずれにしても、ラーフラの出生が釈尊の出家前であったとしたなら、実子でないという可能性を孕んだ、このような事情を背景とした出生が出家の原因になったものと考えられる。

33) インドでは古来から新生児の命名者は祖父である、とされる。中村元 op. cit. (決定版) p. 177. とすると、ラーフラの命名者はシッド・ダナ王 (浄飯王) となる。このことからラーフラという名は、釈尊自身の個人的な、そして内的な事情よりもむしろ社会的、或いは一族内の事情を反映して命名されたものと理解するほうが適切であろう。この命名が釈尊の出家の原因と関連する時、命名者が父であることも十分に考慮に入れる必要がある。

34) ところで、妻がヤショーダラーであったのか、その他の人物であったのか、またその名は史実であったのか、或いは一人の妻だけであったのか否か、ということなどは今ここでは問題とならない。

7. まとめ

本小論は釈尊の一子ラーフラの出生と命名に因んで、そこから釈尊の出家の原因を究明するところに目的があった。ここで、上記した論述内容を簡単にまとめてみたい。

- (1) ラーフラの出生には釈尊の出家前と成道時との二種の伝承がある。前者はパーリの或る註釈文献に見られ、後者は『根本有部律』などの北伝文献に見られる。特に、後者はラーフラが釈尊の実子でないとの疑惑がその話の中心となっている。
- (2) ラーフラという名の語義は「障碍」や「邪魔者」という意味ではなく、「悪魔ラーフのような者」、「ラーフという悪魔性を有する者」と解釈すべきである。
- (3) 悪魔ラーフは太陽と月を呑み込み、そこから日食と月食が生じるとされる。即ち、悪魔ラーフは太陽と月の敵として描かれる。
- (4) 釈迦族の先祖は太陽神であり、釈尊やラーフラは太陽神の末裔である。
- (5) 即ち、ラーフラという名は「太陽や月を呑み込むラーフという悪魔性を有する者」という意味となり、この命名はその背後にラーフラの出生によって釈迦族の家系を断絶させるような出来事や家系に汚れが生じたことを暗示する。
- (6) 釈尊の出家の時期をラーフラの出生後とすると、ラーフラの命名の背後にあるこのような深刻な事情が釈尊出家の原因と考えられる。この深刻な事情とは宗教的理由のような内的なものだけではなく、むしろ社会的、一族の在り方などを意味するものであると見做せる。更に言えば、その事情はラーフラは釈尊の実子ではないという解釈の可能性をも含んだ内容であると想定することができる。

本小論の概略はおおよそ以上の如くである。ただ、このような論述を行うに当たって様々な問題もある。例えば、ラーフラという名が本当に史実であったのかどうかということや、論証に用いた資料が比較的后代の文献であることによって成立上どこまで遡れるかという点などである。これらのことを解決する客観的な方法を見出すことは極めて困難であると言わねばならない。

しかし、ラーフラという名が仮に史実でなく、仏伝作者の創作名だとしても、このような異常な意味を有する名が付された背後には、この名が創作された成立段階で既に出生に係わる状況が尋常ではなかったということが流伝されていたものと推測できる。故に、このラーフラの名が仮に史実でないとしても、この命名の意義は決して小

さくはないのである。

また、このラーフラの出生伝承は比較的初期の文献には見られず、後代の文献に集中している。そのために、ここで論じたラーフラの命名などの諸問題には真実性が乏しいと見做すのは短絡と言えよう。後代の伝承は史実性が薄いという画一的な見方では後代の文献は殆ど意義をもたなくなる。デーヴァダッタを始めとして仏弟子達の因縁話など、その殆どが後代の文献に見られるものである。必要なことは、それらの中に成立的に遡れる源泉資料があるかどうか、或いは史実を伝える資料があるかどうかを批判的に考察することが求められているのである。

最後に、これほど多くの資料がラーフラの命名に悪魔ラーフが係わっていることを伝えているのに、殆ど省みられることがなかったことは一体何を意味しているのであろうか。それは最初にも述べた通り、文献の成立事情はともかく、少なくとも研究者の信仰に基づいた、或いは善意に満ちた解釈³⁵⁾と意図性が実像への道を閉ざしているものと見ざるを得ない。決してこのような批判的な姿勢は釈尊の偉業を否定するものでもなく、それによって彼の偉大さも微動だにするものではないのであるから。

以上、ラーフラの命名に因んで釈尊の出家の原因を究明しようとしたこの試みも、釈尊の生涯に関する史実を解明する道として肯定しうる範囲ではないかと考える。

35) このような善意に満ちた解釈は、例えば「(比較的初期の文献にはラーフラの母という用例が主であって) ヤショーダラーという名がはっきりと伝えられていないところからみると、おそらく妃は典型的な淑やかなインド貴婦人で、夫に対して従順であったために、表面に現れるほどゴータマの一生に衝撃的な影響を与えなかったのであろう。たとえば妃が悪性の婦人であったとか、淫乱の人であって、それがゴータマの出家の原因となったのであるならば、早くから聖典のうちに個人名がはっきりと伝えられているにちがいない。」という見解に見事に表れているように思える。中村元 op. cit, (決定版) p. 171